

お伽草子
鳴門中將物語
松帆浦物語

鳥部山物語
秋の夜の長物語
鴉鷺合戦物語

校註

日本文學大系

第十九卷

大正十四年九月二十日印刷
大正十四年九月二十三日發行

(非賣品)

日本文學大系

第十九卷

編輯者兼

東京市麹町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

岡功

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麹町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二七八三番
振替東京五二二九八番

解題

文學博士 尾 上 八 郎

お伽草子

鎌倉幕府時代には、平安朝時代をそのまゝに繼承した文學があると共に、時代の思想感情をさながらに表現した文學があつた。前者を舊文學とすれば、後者は新文學とすべきである。この新舊二様の文學は、續いて室町幕府時代に到つた。散文のみで云つて見れば、前者は増鏡の類、後者は太平記等である。しかし、これらは主として有識階級の讀物で、その以外の人々のそれではなかつた。それは恰も當時に起つた謡曲と狂言との如きもので、狂言が一般的であつたと異なつて、謡曲が上流に限られたと等しく、また從來の歌と新しい連歌との如きもので、連歌が田舎人にまで弄ばれ、殊に誹諧連歌が著しく民衆的であつたと反對に、歌が殆んど公卿にのみ弄ばれたと同様である。この故に、こゝに狂言及び連歌に匹敵すべきものが現はれるのが必要となつて來

た。何となれば、當時は専ら力の時代で、力のないものは、社會的に好位置を占めて居ても等閑視せられ、力のあるものは、名は下層であつても重要視せられるのみならず、主動的に、下にして盛んに上を制した時代、いはゆる下剋上の時代であるから、力のあるものの要求に應ずる散文の起るものは、自然の勢であらねばならぬ。この散文は、乃ちお伽草子である。

お伽草子の名稱の範圍は極めて漠としてゐる。その當時、この名は無論無かつたのである。(享保の頃か、大阪の書肆澀川某が文正草子以下の二十二種及び猫の草子を選んで出して、この名稱を附けたのが始めであるらしい。)故に正しくは室町時代の短篇小説ともいふべきであらう。これらを内容的に、はた形式的に考察してみると、共に淺薄で、拙劣で、蕪雜で、決して優秀な作品として推賞する事は出来ない。然し、これらが以前の時代の源氏、狹衣等の物語の繼承をし、次の時代の假名草子、浮世草子の先蹤をするものと考へる時は、決して等閑に附すべからざるものである。故に絶對的價值は少なくとも、關係的價值は頗る多い。殊にこれらによつて明らかに看取せられるのは、當時の世態各人の趣味、更にそれらを通じて流れる一時代の思潮である。

戦争は社會の攪亂であつた。都鄙は混合せられ、上下は雜糅せられた。しかし、猶習慣的に、田舎は卑しく都は尊く、公卿大夫は優秀で、武士百姓は低劣と思つて居る。天下は室町幕府が確

立してから小康を得て、武士は、折々の戦争の合間には、氣樂に遊ぶ事も出来るのであるから、種々手近な快樂を貪つたのであるが、手近であるだけ極めて淺薄で、殆んど奥行のないものである。故にやや高尚で、深みのあるのを求めるやうになつた。戦争に關係のないものは、もう人馬の踏躪、殺傷、掠奪、放火等は、つくづく厭になつた。今の亂雜は實に堪へ難い。かかる事のかつた時代はどんなによかつたであらうと、太平の代に憧憬の眼を放つ。ここで、油然として起り來つたのは、著しい尙古主義、殊に平安朝を目標としての尙古主義である。然し、その理想の時代をよく理解するのには、多くの書物に就かねばならぬ。それは、修養のない者には出來難い所である。ただ望み、ただ仰ぐ。故に古いものは、實物以上に大きく見え、また尊く見える。平安朝時代の人は、よく歌を詠む。また音楽をする。詩歌管絃は、その頃の人々の主要な技藝である。音楽は今もする。しかし、今のは拙劣で、低級である。昔のに限る。昔はこれによつて、天人も下向し、諸佛も感應したと考へると、昔のものは、神祕的の趣さへ加へて、極めて尊く見える。これによつて、種種の形の音楽物語は生じた。義經が、女護の鳥、蝦夷が鳥で、笛を鳴らして島人等の害意を除き、また千鳥の都に著いて、同じく笛を吹いて、鬼を感動せしめ、それを因由として兵法を習ふといふのや、侍従が、父の孝養に笛を吹くと、梵天帝釋までも感じ、梵天國

の姫君が降嫁する。それが羅刹國王に奪はれると、また笛を吹いて王を感じしめ、終に、姫君を奪還するといふの類、みな音楽を、奇特、奇瑞のあるものとして表現したのである。音楽に連れて、舞曲もまた同様とせられるに到つた。萬壽が鶴が岡社頭で今様を歌つて、舞の袂を翻すと、頼朝の心も解けて、終に囚はれの母の許される如きがそれである。但し、これらの多くは説話の一局部を形作つて、全體を組立てるには到つてゐない。これよりも過ぎて重要視せられたものは歌である。歌は今人も作るが、音楽と同じく拙であつて、上手なのは昔に限る。昔の歌は、まことに及び難く尊いものである。かく思ひ來ると、それが非常に幽玄なものと見えて來る。この幽玄の趣とよく一致するのは、當時戰亂の結果で盛んに流行した佛教である。歌と佛教とは全く異なつたものであるが、前時代頃から、漸次一致するものと考へられ、歌を作るのは佛道に入る好方便とも云はれてゐた。この傾向が愈進んで、歌の解釋も佛教の教理を以てするに到つた。乃ち歌の三十一字は、三十二相を體理したものであるが、恐れがあるので、わざと一相を缺いたのである。この故に、歌を作るのは佛を作るに等しい。よく詠めば佛を作つて供養するのと同じく、悪く詠めば、佛を作り損じたのと等しい。だから、歌はよく作らなければならぬ。作らないとすると、よく知らねばならぬ。それでないと、佛の深意は曉られない。例へば人麻呂の作と云はれ

る「ほのく」との歌も、二句で衆生の迷の心、四句で三界流轉の心、結句で大慈大悲の愛憐の心を示したもので、すべて衆生救済の意味を表現したのである。この深意は、詠まなくては、或は知らなくては理解し得ない。かく、歌は大切なもの、大事なものと考へると、自づから歌物語の一類が出来る。平安朝には、歌中心の物語が數多あつた。しかし、それは、ただ男女の贈答が主で、その趣を樂しむのであつた。こゝではそれと異つて、意外の効果、驚くべき靈驗を説くのが大旨である。歌を知つてゐたため、伊勢の鰯賣の猿源氏は、身に負はぬほどの美人を得ることが出来た。淫蕩な和泉式部は、歌のために我子と契つて、菩提の道に入つた。伊香郡の郡司は、歌の上句を觀音から得たために、近江半國の主となつた。物吳太郎は、連歌が出来たので、美人を得たのみならず、中將にまで上つた。かくの如き有様であるから、人間のみならず、心あるものは、動植物までも詠み、且つ理解する。鶴も詠む。龜も詠む。梟も、鸞も、山雀も詠む。猿も詠む。狐も詠む。ことに、狐の玉水の前は、すぐれて上手で、長歌までも詠む。蜻蛉、蛙、蝗、鈴蟲、蛸、蟬、松蟲、玉蟲等皆詠む。こほろぎの如きは、多くの蟲に勸めて、歌の筵まで開く。夕顔、萩、女郎花、桔梗、百合、朝顔、山吹、薄、刈萱等皆詠む。すべて「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。」有様である。故に、人として詠まず、理解しないのは大なる恥であ

る。この歌を詠み、且つ理解した効果を説く歌物語は、やがて、詠まず、理解しない人に向つての訓戒である。歌の故實、詠み方、詠む場合、詠むべき語句等に關する種々の教示である。かく歌物語の一面には、また作歌の教訓があるのである。

歌が男女會合の媒となるのは、昔からの事である。歌があつて戀は成就する。歌と戀とは、相關的關係がある。従つて、歌物語は戀愛物語である。戀の對手となるものは、歌を知るのみならず、よく詠む美男子であり、美人である。男には定平の中將、丹後の少將、鉢かづきの宰相等の或は慈悲忍辱、或は高雅優美の性質を備へて居るが、更にいづれも歌をよく詠むのである。ただ日本人のみならず、維曼國の金色太子の如きも、勇敢な美男子で、その上歌よみである。しかしこの美男子は、時に不具であり醜夫である。一寸法師や、物臭太郎はそれである。が歌を詠むので佛の力、神の御蔭を被つて、常人以上の立派さとなつて、美人と結婚する。これらの男に對する女は、李夫人、楊貴妃、衣通姫も及ばぬ人々である。岩屋の姫、野もせの姫、鉢かづきの姫、かざしの姫、和泉式部等、光り輝き、心も語も及ばぬ美しさであるのみならず、歌に巧みで、應答流るる如く出来る。日本人以外の、翟婁國の姫君も、人間以外の、龍女も、美しくしてまた歌をよく詠むのである。人が戀をすると同じく動植物も戀をする。猿も、梟も、蟋蟀も、松蟲も、

菊も、皆男になり、狐、龜、兔、鶯、鶴、玉蟲等も、女となつて、いづれも風流なる戀をする。しかし、すべてのものが歌を詠む。それによつて、戀は成就するのである。異類物語の多くはこれである。

しかし、事情の極めてむづかしい場合になると、戀は中成就しない。男も、女も、大變な苦勞をする。それで一方は悲惨な死に方をし、更に生をかへて成就するものもある。このむづかしい場合にあつて、困難な冒險的行動を取らねばならぬ事がある。こゝに於て遍歷物語が起る。一寸法師の如く暴風に遭つて鬼が島に上つて、鬼と争はねばならぬものもあり、中納言の如く、狂暴な國王から女を取り還すべく、笛を吹いて王を欺瞞し、二千里走る車を奪つて逃げ、又孔雀と迦陵頻の御蔭でやつと助かるものもあり、金色太子の如く、幾十年も茫漠たる天界を旅行して、様様の星辰に逢ひ、星河を渡り、地獄に下り、極樂に上り、漸く女の居處に辿り著くものもあり、定平の中將の如く、岩窟の奥深く、幽闇の境を經、銅の築土、鐵の門を過ぎて鬼の宮殿に入つて、比翼の語らひをするものもある。これらは男であるが、時には女もある。長者の女が、天稚彦を慕ひ、一夜杓に乗つて昇天し、夕星、帚星、昴星に教へられて、瑠璃の地、玉の宮殿に行つて男に逢ふといふものもあるが、此の類は極めて多くない。この冒險的行動には、強固の意志を要する。更に

時には武勇を要する、止まつても思ひ死に死ぬる。行つても災に逢つて死ぬる。同じ死ぬるならば、どこまでも進まうと云ふのが、一般である。しかして、災を拒ぐべく多大の武力と智畧とが要る。名劔を一たび振へば、一千人の首が落ちるのもあり、口から呑まれれば目に脱けて鬼を驚かすものもある。それで、一は國を讓られ、一は鬼の珍寶を得た。

この武勇は、當時の武士第一の時代には、極めて大切な徳である。故に、これのみが中心となつて、多くの説話を構成する。武勇物語はそれである。瀬多の橋の大蛇を躍り越えたので、依藤太が、龍女に頼まれ、唾の計を以て蜈蚣を退治し、又燈火の影で逆臣を射倒すのや、修行者に化けて巢窟に入り、神酒に酔はせて、頼光が多數の惡鬼を斬殺するのや、娘を種にして、義經が鬼王から極祕の兵法を奪つて逃げ歸るのや、いづれも、當時の尙武的思想を反映したものである。

種々の戀が成就して家庭が出来上ると、夫婦の和合、春風駘蕩の如き間に、子が生れる。これも神佛の力による申子が多い。これによつて繁昌を増すのであるが、不幸にして母親の方が缺ける事がある。男は止むなく他から後妻を迎へる。ここに於て、新に起るものは、繼母繼子の關係である。後妻の性質が極めて溫良な場合は問題はない。多くの場合に於いて、兩者の間に感情の溝隔が生ずる。ことに、繼母に實子が出来ると、この溝隔がいよゝ／＼大きくなる。ここに於て繼

子物語が発生する。この物語は、決して新しくない。平安朝時代にすでにある。宇津保物語にもあり、源氏物語にもあるが、落窪物語が、その代表作である。住吉物語も、今のものによれば、またその一である。しかし、それらはまだ極端までには到らない。當時の人心は、幾多の争亂を経て、甚しく荒びてゐる。故に、繼母は、繼子を極度まで壓迫する。鉢かづき姫は追ひ出され、野もせの姫は川に、對の屋姫は海に沈められかかる。これらは皆女であるが、男の方面でも、稚兒の花みつは、繼母の心を量つて、自から進んで殺される。この虐遇に對しては、自づから、その報復も甚しく峻烈である。鉢かづきの繼母は、離別せられて困窮するのみであるが、野もせ姫のは自害し、對の屋姫のは狂死する。これらの悲惨事が續出しないにしても、親子の間に於て、自づから要求せられるのは、孝の徳である。總て孝あるものは、天をも諸佛をも感動せしめて、意外の幸福を得る。況んや、力行者とはいへ、文正の如き下民が大發展をして、下にして上を凌ぐ勢をもつのみならず、歴史の示すが如く、有力な下が上を強壓する當時の下剋上の風に堪へ兼ねたものが、その防止をなすべく、長上尊敬の徳を養はしめるのは、これに越すものはない。故にここに孝行物語は生じた。支那傳來の二十四孝の話は、好模範である。楚の大しうの七草、天竺のしじらの蛤の説話も、また大切である。殊に萬壽の至孝は、たゞ母を救つたのみならず、數

數の寶を得て一家一門を光耀せしめた。この徳は實にかくの如き効果のあるものである。子たるものをして、これに習はしめなければならぬ。これ當時に於ける最必要であつたのである。

しかし、以上の、歌も、戀愛も、遍歴も、武勇も、繼子の發展も、孝子の出世も、皆人間一つの力では完全になり得ない。人間の力は極めて微々たるもので、いかに奮發しても、いかに健闘しても、出来るものは、ただ一部である。これをして、完備せしめ、玉成せしめるものは、神佛の力である。神と佛とは、古くからすでに一である。この神佛尊崇の思想、殊に神佛の現代利益の思想は、いかなる所にもある。歌や音樂の尊信が一般的であり、戀の追求が普遍的であるよりも、この思想は、その根柢を、深く且つ大きく流れてゐる。歌の文句が、すでに佛の相の象徴であり、その内容も、宗教思想の表現である。この多大の關係あるが故に、佛の示現によつて、始めて、名歌が出来上る。石山の觀音の利生によると、まだ見ぬ歌の半分をも續ぐ事が出来る。戀愛でも同様である。初瀬の觀音のために、鉢かづきも良縁を得、毘沙門天のために、定平も鬼女に契り、善光寺の如來のために、物呉太郎は甲信兩國と良妻とを得、住吉明神のために、一寸法師は出世し、鹿島明神のために、文正の女は中將の北の方となつた。人間のみならず、のせ山の猿も、日吉明神のために、戀に成功するのである。神佛の援助がなかつたならば、これらの努力

は、皆徒事となつたのである。遍歴の求婚者も、亦同様である。梵天國までも昇つた中納言も、清水の觀音の教によつて、再び戀を得たのである。大刀を振ふ金色太子も、諸佛、諸菩薩によつて大梵天宮で女に逢つたのである。武勇者も、神佛の後援がなくては、その勇を專にする事が出来ぬ。依藤太も、三井寺の彌勒によつて初めて奏功した。頼光の智勇を以てしても、猶住吉、熊野、八幡、三神の庇蔭によつて、僅に妖鬼を仆したのである。牛若の矯捷を以てしても、江の島辨財天の化身の天女によつて、漸く兵法を取り得たのである。虐待せられた繼子も、或は初瀬の觀音により、住吉、稻荷の明神によつて、初めて良縁を得て、富貴となつたのである。孝子も、同じく神佛の利生を蒙つて、孝徳が成就する。萬壽の鶴ヶ岡八幡の庇蔭によつて、母を救ひ出したのも、これである。かくの如く、神佛の靈驗は、大きく且つ深いものである。故にこれが更に進むと、それによつて、人は忽ち神とも、佛とも成り得る。生きながら成佛せられたさざれ石の宮は特殊として、神佛の加護によつて、社會的に精神的に成功した人は、一步進んで死後神佛と現はれる。梵天國の侍從中納言は、久世戸の文殊となり、北の方は成相の觀音となり、鬼女は貴船の明神、定平の中將は客人神となり、金色太子は毘沙門天、姫君は吉祥天女、物吳太郎夫妻はおたがの明神、朝日の權現、佐伯及び妻妾は彌陀、觀音、勢至となつた。これを逆にすれば、神

佛の本源を説く事となるのである。ここに於て、いはゆる本地物語が出来たのである。「およそ、凡夫は本地を申せば腹を立て、神は本地を現はせば、三熱の苦しみをさまして、直に喜びたまふなり。」で、この物語は、自然に、神または佛の意に叶ふものである。この故に「毎日一度、此の草子を読みて人に聞かせむ人は、財寶にあきみちて、幸心に任すべしとの御誓。」となつて、これがまた、靈驗を世に布くこととなるのである。

戦亂の結果として、人心が狡黠になり、皮肉になり、而して猥雑になつたに連れて、出来た多くの狂言と共に、ここにもまた、滑稽物語が出た。福富草子、音なし草子等はそれであるが、これらは、極めて少なく、お伽草子は大體に於いて、神佛ことに佛教に根據を置いて成つたものである。この佛教に、人間は勿論依據して、現世に利生を被り、未來に菩提を得ようとする。人間以外の、付喪神に現はれる怪物どもも、またこれによつて成佛しようとする。従つて、それが、ただ神佛の靈驗を説くに留まる場合と、一步進んで神佛の本地を述べるに到る場合とある。故に二大別をして、一部をただの靈驗物語、他をその進んだ本地物語とすることも出来る。乃ち前者を單式とすれば、後者は自づから複式となるべきである。

上述の如く、お伽草子は大體神佛ことに佛教を根柢として成つた靈驗及び本地を説いたもので

ある。これが當時の思想の、最もよい表現であるが、考へて見ると、極めて低劣なものである。佛説は極めて深い。それは有識者ならでは理解し難い。平安朝末期から、簡易な宗派が起つて、何人にも直ちに理解すべくなると共に、それを體現した佛敎文學の多くが出た。それらの主とするところは、厭離穢土であり、欣求淨土であつた。然し時代が下ると、學識がよいよ下つて、これすらも理解しないものが多くなつた。況んや、下民が盛んに擡頭して來たこの時代に於てをやである。故に、ここに、佛敎者は、更に一階を下つて、現代利益を説かなければならなくなつた。勿論從來にもこの事はあつたのであるが、この時の如く甚しくする必要はなかつた。それのみでは足らず、進んで本地をも説く必要はいよいよなかつた。これをも説かなければならなくなつたのは、極まつた低下である。無識階級相手の説敎は、實にかくの如くならなければならなくなつたのである。否説く者すでに、相手とともに低下し來つたのである。これを當時の上流相手の諷曲の思想と較べたらば、思半に過ぎるものがある。

お伽草子は、以上の如き思想をもつてゐるのであるが、更に、當時の人人の世界又は宇宙に關する知識の程度を示してゐる。陸奥から出て土佐の港を舟出すると、裸島、女護島、蝦夷が島の島島があり、異様な人間が生活してゐる。その奥に千島があつて、そこに、鬼王が都してゐる。

そこに到るには、四百三十餘日を費す。博多から便船すると、千日過ぎて羅刹國に到る。そこに惡王が住まつてゐる。また地上に穴がある。富士の麓のそれから入ると、地下の世界に行かれる。そこに大蛇がゐる。それを過ぎると、百三十六地獄がある。そのさきには、極樂世界がある。或は鞍馬の奥の穴に入つて、幽闇中を五十里も行くと、鬼國があつて、食人鬼王がゐる。愛宕の奥の細道を進むと、野でもなく、山でもない地がある。それを通ると、梵天國の内裏があつて、梵天王がゐる。又西の京の一夜杓に乗つて、昇天すると、夕星、帚星、昴星等がゐる。その奥に天稚彦が居り、その親の鬼も居る。野もあつて牧牛も數多ゐる。又夕星等の星に道を尋ねて行けば、諸菩薩がゐる。天河がある。三途の川がある。地獄がある。而して、兜率の内院があり、大梵王宮がある。陸奥と土佐と近く、土佐と千島と近く、地下にも地獄あり、天上にも地獄あり、その地獄の向うに梵天宮があり、或は手前に梵天王がゐる。この縦横に混合し、前後に雜糅してゐるところが、當時の思想であり且つ知識である。これに安住して、特に疑惑を挿まなかつたのは、今日から見て興味があるではないか。それにしても、神と佛とは、何處にでも居り、何處へでも現はれる。畢竟天上も地下も、この世界も、すべて神佛の住處である。お伽草子はここで根據を据ゑてゐる。